貉

小泉八雲
戸川明三訳

東京の、赤坂への道に紀国坂という坂道がある――これは紀伊の国の坂という意である。何故それが紀伊の国の坂と呼ばれているのか、それは私の知らない事である。この坂の一方の側には昔からの深い極わめて広い濠（ほり）があって、それに添って高い緑の堤が高く立ち、その上が庭地になっている、――道の他の側には皇居の長い宏大な塀が長くつづいている。街灯、人力車の時代以前にあっては、その辺は夜暗くなると非常に寂しかった。ためにおそく通る徒歩者は、日没後に、ひとりでこの紀国坂を登るよりは、むしろ幾哩も廻り道をしたものである。

これは皆、その辺をよく歩いた貉のためである。

貉を見た最後の人は、約三十年前に死んだ京橋方面の年とった商人であった。当人の語った話というのはこうである、――

この商人がある晩おそく紀国坂を急いで登って行くと、ただひとり濠(ほり)の縁(ふち)に踞(かが)んで、ひどく泣いている女を見た。身を投げるのではないかと心配して、商人は足をとどめ、自分の力に及ぶだけの助力、もしくは慰藉を与えようとした。女は華奢な上品な人らしく、服装(みなり)も綺麗であったし、それから髪は良家の若い娘の

それのように結ばれていた。――『お女中』と商人は女に近寄って声をかけた――『お女中、そんなにお泣きなさるな！……何がお困りなのか、私に仰しゃい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助け申しましょう』（実際、男は自分の云った通りの事をする積りであった。何となれば、この人は非常に深切な人であったから。）しかし女は泣き続けていた――その長い一方の袖を以て商人に顔を隠して。『お女中』と出来る限りやさしく商人は再び云った――『どうぞ、どうぞ、私の言葉を聴いて下さい！……ここは夜若い御婦人などの居るべき場処ではありません！　御頼み申

すから、お泣きなさるな！――――どうしたら少しでも、お助けをする事が出来るのか、それを云って下さい！』徐ろに女は起ち上ったが、商人には背中を向けていた。そしてその袖のうしろで呻き咽びつづけていた。商人はその手を軽く女の肩の上に置いて説き立てた――『お女中！――――お女中！――――お女中！　私の言葉をお聴きなさい。ただちょっとでいいから！……お女中！――お女中！』……するとそのお女中なるものは向きかえった。そしてその袖を下に落し、手で自分の顔を撫でた――見ると目も鼻も口もない――きゃッと声をあげて商人は逃げ出した。

一目散に紀国坂をかけ登った。自分の前はすべて真暗で何もない空虚であった。振り返ってみる勇気もなくて、ただひた走りに走りつづけた挙句、ようよう遥か遠くに、蛍火の光っているように見える提灯を見つけて、その方に向って行った。それは道側(みちばた)に屋台を下していた売り歩く蕎麦屋の提灯に過ぎない事が解った。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、以上のような事に遇った後には、結構であった。商人は蕎麦売りの足下に身を投げ倒して声をあげた『ああ！――ああ‼――ああ※［#感嘆符三つ、231-8］』……

『これ！　これ！』と蕎麦屋はあらあらしく叫んだ『こ

れ、どうしたんだ？　誰れかにやられたのか？』
『否（いや）、――誰れにもやられたのではない』と相手は息を切らしながら云った――『ただ……ああ！――ああ！』……
『――ただおどかされたのか？』と蕎麦売りはすげなく問うた『盗賊（どろぼう）にか？』
『盗賊（どろぼう）ではない――盗賊（どろぼう）ではない』とおじけた男は喘ぎながら云った『私は見たのだ……女を見たのだ――濠の縁（ふち）で――その女が私に見せたのだ……ああ！　何を見せたって、そりゃ云えない』……
『へえ！　その見せたものはこんなものだったか？』

と蕎麦屋は自分の顔を撫でながら云った――それと共に、蕎麦売りの顔は卵のようになった……そして同時に灯火は消えてしまった。

底本：「小泉八雲全集第八巻家庭版」第一書房
１９３７（昭和12）年1月15日発行
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。
その際、以下の置き換えをおこないました。
「或る→ある　此処→ここ　此→この　其→その　只→ただ　一寸→ちょっと　て居る→ている　見る→みる　若しくは→もしくは」
入力：京都大学電子テクスト研究会入力班（山本貴之）
校正：京都大学電子テクスト研究会校正班（大久保ゆ

う）

２００４年3月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。